

タ ラ ノ キ の 品 種 特 性

阿 部 清・大 木 淳*・川 村 啓 造

(山形県立園芸試験場・*新庄農業改良普及センター)

Varietal Characteristic of Japanese Angelica Tree, *Aralia elata* Seem

Kiyoshi ABE, Atushi OHKI* and Kizou KAWAMURA

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・
*Shinzyo Agricultural Extension Service Center)

1 は じ め に

本県におけるタラノキ栽培は、昭和40年代に山野の自生株を採取して促成する方式で拡大し、昭和50年代以降は主産地となっている。

栽培方法は、昭和50年代後半以降に、側芽を活用した促成栽培（露地で栽培したタラノキを落葉後に切り出してハウス等の促成室で萌芽させる栽培方法）が主体になり、穂木（栽培されたタラノキの当該年度に伸長した主茎）、と種根（タラノキの増殖用の根。通常は前年に伸長した根を用いる。）を用いた増殖並びに促成方法を、普及センター等の指導により組み立てた。また、収量性が高く、品質の優れた品種及び系統が導入されるようになってきている。

平成10年6月に種苗登録されたタラノキ新品種である‘あやの’と従来の主力品種である‘蔵王2号’及び‘新駒’との諸特性の比較調査を実施したので報告する。

2 試 験 方 法

特性調査は、慣行栽培に準じ、穂木の栽培は現地山形県真室川町で、根伏せ法（種根を用い、不定芽によりタラノキを増殖する方法）により植栽を行い、各品種1区10株、2反復で実施した。促成栽培の調査は、現地山形県新庄市で、1区穂木5本、2反復とし、駒木（促成のため、1～2節に切断した穂木）に調製し1芽挿しで行った。栽培概要は以下のとおりである。

(1) 穂木の栽培

- ・栽植期日 平成4年4月
- ・植付方法 本畑直接、黒ポリマルチ栽培
- ・栽植距離 うね幅2 m, 株間90 (556株/10a)
- ・仕立方法 2本仕立

(2) 促成方法

- ・穂木の収穫期日 平成6年11月24日
- ・促成時期 平成6年11月26日～（あやの、新駒の休眠期）
- ・加温方法 電熱線空中配線（200W/坪）によるトンネル密閉方式
- ・温度管理 20-15℃～13-8℃

3 試験結果及び考察

(1) 生育特性

生育は、‘あやの’が最も旺盛であり、樹高で310、樹径で40.8mmであった（表1）。

表1 穂木の生育特性（1994.10調査）

品種名	長さ cm	節数 節	樹径 mm
あ や の	310	34.8	40.8
蔵 王 2 号	202	29.2	29.2
新 駒	247	31.6	35.0

注. 1) 長さは地上部の高さ

2) 樹径は第10節間の太さ

観察による側芽の大きさは、‘あやの’は‘蔵王2号’より大きく‘新駒’より小さかった。葉の形状は、‘あやの’は‘蔵王2号’と同じで大きく、‘新駒’は小さかった。複葉数は、‘あやの’は‘蔵王2号’に比較して少なく、小葉数についても同様な傾向があった（表3）。

落葉割合は、‘あやの’は‘蔵王2号’及び‘新駒’に比較して高く、落葉が早かった。落葉期については、‘あやの’は10月第5半旬、‘蔵王2号’は11月第1半旬、‘新駒’は10月第6半旬であると推察された（表2）。

表2 落葉特性（1994.10.11調査）

品種名	落葉数 枚	落葉比率 %	落葉期 月. 半旬
あ や の	13.8	39.7	10.5
蔵 王 2 号	8.2	28.1	11.1
新 駒	9.0	28.5	10.6

注. 1) 落葉比率は節数（全葉数）に対する比率

2) 落葉期は全ての葉が落葉又は枯死した時期

総じて、‘あやの’は穂木の生育が極めて旺盛であり、落葉期及び休眠開始期が‘蔵王2号’及び‘新駒’に比較して早いことから、年内の促成にしており、実用性が高い品種であると考えられた。

(2) 収量及び品質特性

駒木は、‘あやの’が‘蔵王2号’及び‘新駒’に比較して大きかった。また、収穫までの日数は、‘新駒’が早く、

表3 その他の諸特性 (1994, 1995調査)

品 種 名	茎				新芽 (頂芽)			
	太さ	刺の多少	頂芽の芽の発達	側芽の発達	長さ	太さ	毛茸の有無	萌芽の早晚
	mm				mm	mm		
あ や の	41	やや多	中	中	85	33	極少	早
蔵王2号	29	中	弱	強	78	30	極少	中
新 駒	35	極少	大	中	65	32	少	早

品 種 名	葉				促成芽の形質			
	大きさ	複葉の数	複葉の長さ	小葉の数	萌芽の難易	毛茸の有無	葉鞘の長さ	色
	cm	本	cm	枚				
あ や の	132	110	4.6	55.2	やや易	極少	長	やや淡緑
蔵王2号	132	104	5.2	55.2	中	極少	中	緑
新 駒	114	60	4.0	30.2	やや易	少	短	緑

注. 表中の数値以外は、品種特性表 (種苗法) に準じる。

表4 駒木と収量 (調査時期 1994.12)

品 種 名	駒 木				伏込みから 収穫までの 日 数	促成芽			仮収量
	重量	高さ	直径	本数		全重	個数	平均重	
	g	mm	mm	個/穂木	日	g	個	g	kg/10a
あ や の	711.9	88.6	35.8	27.4	28.2	1,516.3	137	11.0	256
蔵王2号	49.3	83.4	31.4	23.0	28.9	819.8	115	7.1	139
新 駒	52.9	86.3	28.6	26.2	26.7	1,481.0	131	11.3	252

- 注. 1) 促成芽の全重及び個数は穂木5本当たりの数値
 2) 駒木は穂木を慣行法により1芽に調製した。
 3) 仮収量は10a当たりの穂木の本数を850本 (556株/10a×2本/株×0.77) とした。
 4) 促成日数は、休眠期の栽培条件下のデータ

表5 階級別収量と品質

品種名	階級別収穫本数				A品率
	2 L	L	M	S	
	%	%	%	%	%
あ や の	24.1	62.8	10.9	2.2	95.6
蔵王2号	0.9	33.9	28.7	36.5	96.5
新 駒	32.8	51.2	13.7	2.3	88.5

- 注. 1) 階級：最上地域統一出荷規格 2 L : 13 g 以上,
 L : 8 g 以上13 g 未満, M : 6 g 以上8 g 未満,
 S : 6 g 未満
 2) A品率：最上地域統一出荷規格により、品質が
 優れるものをA品とした。

次いで‘あやの’、‘蔵王2号’の順であった。たらの芽の平均重量は、‘あやの’及び‘新駒’が大きく、次いで‘蔵王2号’であった。仮収量 (穂木の収量を850本/10aとした場合) は、‘あやの’及び‘新駒’が多く、約250/10aで、‘蔵王2号’は約135/10aであった (表4)。

階級別収量 (最上地域統一出荷規格による) は、‘あやの’及び‘新駒’のL品率が高かった。‘新駒’は葉しょうの奇形が多く、A品率 (最上地域統一出荷規格による) はやや

低下した (表5)。

以上のことから、‘あやの’は、蔵王2号に比較して促成芽の葉色がやや淡いが収量が高いこと、‘新駒’に比較して収量は同等であるが促成芽の葉鞘が長く毛茸が少ないことから普及性が高いものと考えられた。

4 ま と め

平成10年に種苗登録したタラノキ新品種‘あやの’の特性を現地で調査した。

その結果、‘あやの’は、穂木の生育が極めて良く、収量性は極めて高かった。市場性も高く、本県で有望な品種であると考えられた。

‘あやの’の諸特性を他品種及び系統と比較した結果、‘新駒’との比較では、草丈が高く、茎の刺が多く、茎の側芽の発達が劣り、葉の紅葉の時期が早く、促成芽の葉鞘が長く、毛茸が少ない。‘蔵王2号’と比較すると、草丈が高く、茎の側芽の発達が良好で、複葉の数が少なく、落葉の時期は早い。促成に関する形質では、萌芽が容易で、促成芽の葉鞘が長いこと等の特性を有する。